



校長室だより 2022年度11月号

Be creative!



## 第20回高校生福祉文化賞エッセイコンテスト入賞

うれしいお知らせです。毎年、日本福祉大学、朝日新聞社主催で行われている「高校生福祉文化賞エッセイコンテスト」に2人の生徒が入賞するとともに、学校としても2年連続で「優秀学校賞」を受賞しました。今回の校長室だよりではその2人の生徒の作品を皆さんにご紹介します。

最優秀賞 第3分野「わたしが考えるこれからの社会」—すべての人が幸せであるために

### 私が進む道しるべ 日本福祉大学付属高校3年 柳 優恵

「なんで私だけ。」

私は6年間ほど祖父を自宅介護していた。祖父は脳梗塞の後遺症で左半身がほとんど動かず、歩くにも立つにも座るにも介護が必要だった。そして次第に認知症の症状も出始めていた。祖父を介護するために、朝から晩まで付きっきりの生活。トイレの手伝い、おむつをはかせて、ご飯を食べさせ水を飲ませる。夜中に大きな音がして目が覚めると祖父が転んでいて、それを起こして…。そんな毎日でいつのまにか私は「なんで私だけこんな思いをして生活しているのだろう。」と考え込んでしまうようになった。

そんな毎日だったが、祖父がようやく老人ホームに入所することになった。正直ホッとした。「やっと皆と同じ条件で学校に行ける。祖父がいるからと遊ぶのをためらわなくていいんだ。」と思ったら泣けてしまった。だが、この瞬間、私と同じ思いで学校に通っていた人がいたかもしれない。介護に疲れているのに誰にも相談することができない人がいるかもしれない。

私はこの時の経験から、辛い、困っている、生活が難しいと感じている人を手助け出来るような仕事に就きたいと考えている。また、子どもの虐待や鬱の人を助けられるような人になりたいとも思っている。

もしも祖父に介護が必要でなくて、元気に過ごしていたのであれば、私は辛い思いをせずに済んだかもしれない。だけれど、祖父には介護が必要で、私がそういう日々を過ごしたから今の私が、これからの私ができるのだ。祖父は今年の2月に亡くなった。コロナ禍であまり施設に行けなかったけれど、私のことを最後まで覚えていてくれた。もう伝えられないけれど、はっきりと言いたい。

「じじがいたから、私は自分の道を開けたよ。あの経験が、私の道しるべになったんだよ。本当に心からありがとう。」

### 受賞式(10月23日)での柳さんのあいさつ

今回、このようなすばらしい賞をいただくことができ、とてもうれしいです。介護という辛い経験ではありましたが、私が将来を決めるきっかけとなったとても大切な思い出だったため、強い思いを含めてエッセイを書きました。その思いを伝えられることができ、心からうれしく感じます。今回のことを糧にもっと成長したいと思います。ありがとうございました。



### 第20回記念特別賞 リスペクト 日本福祉大学付属高校1年 中田 崇文

私は「リスペクト」という言葉が好きだ。

ある夏のサッカーの試合のときの話だ。私はユニフォームに着替えてロッカールームを後にした。外に向かって歩いていると、相手チームの選手に「こんにちは。」と言われた。普段なら挨拶を返すが、試合前、相手にする必要はないと思い通り過ぎた。ピッチに立ち、周りを見渡すと天気は快晴で、絶好のサッカー日和だった。

試合が始まった。序盤から激しいあたりや、攻撃と守備が繰り返されていた。気温よりも熱い白熱した戦いだった。

時間は後半の30分が経過した頃だ。味方の選手の足がつってしまった。きっと頑張っただろうと思い、近づこうとした時だ。相手チームの選手が足を伸ばしてくれたのだ。私は戸惑った。敵だから助ける必要はないと思っていたからだ。そう思いながら代わるために話しかけた。すると、「この子に、よく走ったよ、ナイスプレーって伝えてお



いて。」と言われた。このとき、私は気づかされた。たとえ敵だとしても、一人のサッカー選手を「リスペクト」してくれているということ。

ふと試合前に挨拶をされたことを思い出した。私をリスペクトしてくれていたと思うと、挨拶を返せなかったのは申し訳ない気持ちでいっぱい。

その後、最後の最後で点を決められ、試合に負けてしまった。しかし、気持ちは青空のように晴れていた。試合の勝敗で学んだこともあるが、なにより相手を思いやり、尊敬する「リスペクト」の心を学べたからだ。

これからはリスペクトを大切にしよう。そう心に誓った。リスペクトすることで、たくさんの人の笑顔を見られる。その笑顔で自分も心が満たされると思ったからだ。

今でもその心を大切にしている。なぜなら、たくさんの「返事」がもらえるからだ。

### 授賞式での中田君のあいさつ

今回、このような賞をいただき、ありがとうございます。相手を大切に、リスペクトの精神を大切にしてほしいという思いでこの文章を書きました。同じスポーツをする競技者、この相手がいなければスポーツはできません。スポーツに取り組む中で、リスペクトの精神の大切さに気づきました。この考えがもっと広まって、熱く、楽しくスポーツができるようになってほしいし、自分もそうありたいと強く願っています。



## 10月29日(土)Global Meetup2022を開催しました！14:00から16:30

参加校, **Taiwan**: Kaohsiung Municipal Gushan Senior High School / National FengHsin Senior High School

**Philippines**: Mindanao International College / The University of the City of Manila / Philippine Nikkei Jin Kai International School / Silay Institute College and Senior High School

**Cambodia**: Provincial Teacher Training College

**Japan**: Nagoya City Kikuzato Senior High School / Nihon Fukushi University and Affiliated High School



昨年よりも参加校が増えたこと、名古屋市立菊里高校の皆さんが本校まで足を運んでくださったこともあり、大変充実をした新たな学びにあふれた取り組みとなりました。

マニラ市立大学で学ぶ Czyrenne さんによる「Presentation Tips」はわかりやすく、本校の生徒の皆さんにとって参考になったのではないのでしょうか。

プレゼンテーションは「Sharing Ideas. Not TV news」と彼女は言います。「Voice should be loud enough to reach the audience.」そのうえで、「English level of audience should be considered.」と彼女は付け加えます。これは、私にとっては新たな発見であったとともに、私も含めて英語を苦手とする人たちにとってはうれしい指摘だと思いました。プレゼンターの話していることが理解できると、当然のことながらオーディエンスの学びの意欲は高まります。相手の言っていることが理解できれば、自分の意見を組み立てることが出来ます。片言の英語ながら、自分の意見を述べてみることもできるかもしれません。会に参加する自分自身の姿勢も変わってきます。主体性が生み出されます。

Czyrenne さんは発表の最後をこんな言葉で締めくくりました。「SIMPATY will arise in the discussion.」プレゼンターとオーディエンスが共に課題について考え、意見を交換し合い、豊かに互いの中に共感の気持ちを育てる。この Global Meetup が目指すところもそこにあります。

経験を重ね、海外の提携校の皆さんの力を借りながら、今後も努力を積み重ねていきたいと思えます。オンラインの画面の中にいる海外の皆さん、そして参加して下さったすべての皆さん、惜しみない支援をしてくださる日本福祉大学の影戸先生・佐藤先生に心より感謝申し上げます。

